

東洋紡績株式会社化合織生産技術部 **田中宏典** (昭和57年卒)

あァー20年もの月日が過ぎ、今でも昨日のことのよう上田の町を思い出します。機能高分子学科、一期生として40名が入学し4年後に卒業して上田を去っていったのは、20数名程度でしたでしょうか。それはさておき、機能高分子学科の記念すべき20周年に心よりお祝い申し上げます。

昭和53年に入学し、新設学科であるため、先輩はいない。伝統・習慣もない。あげくのはてには、実験機材も十分揃っていない。さらに先生方も・・・という状態であったことを記憶しております。そうした中で、新設機能高分子学科は、アットホームな雰囲気の中で、自分たちのスタイルを作ることができたのではないかと思います。当時、繊維学部の中で繊維と名の付かない学科は、機能高分子学科だけでした。繊維からの脱却も一つの狙いがあったように思います。私自身、繊維会社に勤務しておりますが、日本で数少ない繊維学部として今後の対応に期待しております。

この20周年を一つのステップとし、益々機能高分子学科、繊維学部が発展することを祈念しております。

日清紡績株式会社東京研究センター **佐藤貴哉** (昭和58年卒)

「化学と生物学の接点領域の研究に重点をおく」という募集要項の一文に惹かれ、第1回の共通一次試験を経て、機能高分子の2期生として入学した。私は、4年生で松崎研(現在の山本研)に配属となった。松崎研は、発足したばかり。松崎教授、山本助教授、学生が7人、寺子屋の様な研究室だった。研究室を1から自分達で造りあげていく楽しさがあったことを記憶している。「うちの研究室は9 to 9 や!」のかけ声のもと、朝9時から夜中まで、日夜研究に明け暮れた。と言えはかっこいいのであるが、実際は先生方の目を盗んでは、NMR室で将棋をさしたり、真っ昼間のソフトボール、テニス、夏のプール、夜中のゼミ室での酒盛りなど、多くの息抜きも忘れなかった。それでも、卒業や院入試が近づくころは、当時最も硬派な研究室の学生としての自負も有り、「やる時はやるぞ」と泊まり込んで研究や勉強をしたものであった。その後、太田先生が着任され、液晶の研究がスタートし、物性研究分野も強力になった。自分で合成して、自分で物性評価をする山本研の研究スタイルが確立された。

今も企業で、高分子研究者のはしくれとして勤務している自分があるのは、研究のいろはを教えてくれた機能高分子学科のおかげと言える。まさに、私にとっての化学の出発点が機能高分子学科であった。同じ思いの卒業生にとって、出身学科や研究室のアクティビティーの高さを誇れること程嬉しいことはない。創立20周年を迎え、今後も機能高分子学科が更なる発展を遂げる事を祈っている。

群馬大学大学院医学研究科博士後期課程 後藤(旧姓保田)香織 (昭和60年卒)

機能高分子学科設立20周年、ほんとうにおめでとうございます。

思い起こすこと十六年前、医用材料、人工臓器の研究をするためにこの学科に入学をしました。かくして4年生となり、妹尾研究室阿部グループに晴れて入門をしました。研究室は5階で広くて明るく、先生方も先輩方も若くてたくましく、希望に満ち、「医用材料を研究したい」というわがままな希望を快く受けてくださり、研究体制を整えてくださいました。もちろん初めてのことを受け入れるのは、本当に大変だったと思います。細胞を培養する培地は全ての成分をあちこちから集めて作り、炭酸ガスインキュベーターも手作り。クリーンベンチもなく、アングル骨組みのビニールテントの培養室。それでも何もなかったけれどゼロから始めるワクワクどきどきの楽しい時期でした。そんなことができたのもやはり、指導者の頭脳とお人柄だと思っています。ありがたいことに、そのころの経験は未だに私の基本になっています。現在は研究設備も整い、世界の最先端の興味深い材料の合成が進んでいると耳にしております。一卒業生として嬉しい次第です。これからの機能高分子学科のますますの発展をここからお祈りしています。

東京大学大学院工学系研究科応用化学専攻 三輪哲也 (昭和61年卒)

コールドルームの前の談話室は、まだあるのだろうか。生体高分子学講座を出て久しいが、まず初めに思い出した場所は、そこであった。私にとって、あの研究室の広さは羨ましくて仕方がない。諸兄は驚くかもしれないが、当時は大木先生の退官・藤井先生の留学と重なり、研究室のメンバーは近藤先生をはじめ、実に少数だったのである。しかし、なぜ、その場所なのであろうか。実はそこが「発想する」原点であったのかもしれない。大学というのは、「学習から発想へ」をトレーニングする場所ではなかったのだろうか。私の場合、発想する場所というのが、そこだったのであろう。当時の部屋の構成は充実していたと思う。パソコンがあり、料理ができ、広い机があった。そして、デンと居座るコールドルームである。オーバーヒート気味の頭を冷やす空間であり、カラムやサンプルの保存と共に、喉も癒してくれた宝箱。ストップウォッチを持ってコールドルームの前に待機する学友と談話する。千曲川を見おろす眺めのいい勉強机よりも、なぜか生協と化学科を眺めるこの部屋の方が性にあった。

昨年、短期留学したが、そこもコンピューターとコーヒーとコールドルームは一体であった。先生の意図した演出か、はたまた偶然か？いずれにしろ、これらのアイテムは人々を集め、有用な議論はそこから生まれた。発想する頭と、コミュニケーションする耳と口、よく動く手足と、健康な体。どこかの校訓のようではあるが、そこはこれらを育てるよい空間ではなかったのだろうか。今一度、あのコールドルームの前で、コーヒーを飲みながら、発想を磨いてみたいものである。

大塚製薬株式会社製剤研究所 市場哲朗 (昭和62年卒)

私が機能高分子工業施設のお世話になったのは、1987年から90年の外観を改修される直前の時期でした。建物は老朽化し、装置、器具などお世辞にも快適な研究環境とは言い難いものでした。私は、現在最新の機器を会社で使っています。しかし、当時の十分とは言えない装置による創意工夫、家内制手工業的研究は、基本や基礎原理の把握につながっており、今日会社で少し偉そうに講釈を言えるのは、当時があったからこそです。そのような恵まれた環境?において、明日につながる指導をしていただいた教官の方々には言葉に出来ない感謝でいっぱいです。また、年輪の刻まれたレトロな環境が緊張感を適度に和らげ、施設全体によりアットホームな雰囲気を作ってくれていたと思います。さらには、機能高分子の学生でありながら、設備の整った機能高分子に負けてたまるかという反骨心、ここで世界の研究者との競争して居るんだという研究者としての闘争心を養ってくれたと思います。信州のすばらしい自然環境で遊び、少し学び、地方大学というデメリットも今となつては、私にとって大きなプラスだったと思います。情報化時代となり、地方だから情報量、速度ともに差がなくなり、交通網も整備され、地方のデメリットはごくわずかになった今、がむしゃらに基礎研究に没頭し、自分を磨くことは意味深いと思います。最後に、私の勤務する製薬会社でも、製剤などへの高分子技術の応用など、いろんな面で重要度を増しています。これからの高分子工業研究施設、機能高分子学科での基礎研究の発展を祈念しています。

日立化成株式会社筑波開発研究所 永井 朗 (昭和63年卒)

機能高分子学科の創立20周年及び高分子工業研究施設の30周年おめでとうございます。

私は、4年生の研究室配属から修士課程修了までの3年間、高分子合成講座の当時助教授だった山本浩之先生のお世話になりました。ちょうど接着タンパク質に関する研究がスタートして間もない頃で、クモ、ザザ虫、蚕、アコヤ貝等の入手可能な接着タンパク質分泌生物を集めてきては飼育し、解剖しては成分を分析し、アナログペプチドを合成等の研究を行いました。少人数ながら、研究及び講座を盛り上げていこうとする活気のある研究室で、野外調査の延長でバーベキューを行う等の行事もありました。山本先生には、個性的な学生が集まる中、それほど優秀でもなかった私を研究室で最初の大学院進学者ということで常に引き立てて頂き、その半面、先頭に立つからにはそれなりの気構えをしなければならぬと厳しくご指導頂きました。おかげさまで、講座在籍の3年間に4度の学会発表と6報が学術論文として掲載されるという経験をさせて頂きました。研究者としてだけでなく、指導者としての在り方の一端も学ばせて頂き、現在、企業において研究者の一人としてやられているもの山本先生の御指導及び研究室の仲間との繋がりがあったからこそと感謝しております。

今後とも機能高分子学科が益々発展しますことと共に、山本研究室の一層の活躍を祈念いたします。

信州大学大学院工学研究科博士前期課程 日比野聖二 (平成8年卒)

私は現在は博士前期課程二年目で在学中ですが、卒研時のことはやはり懐かしく感じます。私の研究室は、開設したばかりの高分子電子化学講座で、教授の山田先生、講師の小山先生、三人の卒研生で、総勢五人という小さな講座でした。研究室立ち上げということで、必要な機材はほとんどなく、方々から貰ったりしました。もちろん机などさえなかったのので、全部新しいものを買ってもらえ、妙に嬉しかったものです。また、実験室が無く、他の講座に間借りする状態でした。最初の仕事は機器の運搬、掃除など力仕事ばかりで、そういえば、汚れた机の上に新しい板を張り付けて綺麗にしたことも覚えてます。

大学院に進学するとき、教授である山田先生が退官されたため、高分子電子化学講座の教授は、新たに來られた谷口先生になりました。これに伴い、新しい機材の搬入があったため、しばらくの内は”引っ越し生活”が続いてました。そうこうしているうちに助手として安達先生が來られ、気がついたらもう今になってました。卒研時代からは考えられないことですが、現在では院生五人、卒研生七人となり、賑やかになりました。機器類も増え、大分研究室らしくなりました。これで、私のいるうちに実現しなごうなことは、実験室の確保だけでしょう。

研究室一期生ということで色々大変なこともありましたが、設立に関われたことは非常に面白く貴重な経験だったと思います。そんな時期にちょうど居合わせたことを大変嬉しく思っています。